〈第145回定期演奏会〉

Program Note

曲目解説「演奏をより深く楽しむために」
音楽評論：東条碩夫

ショスタコーヴィチ：ピアノ協奏曲 第1番 ハ短調 op.35

初演：1933年10月15日　レニングラード（現サンクトペテルブルグ）

才気煥発、若き作曲者の面目躍如

曲の完成は、1933年7月20日とされている。

のちに彼がある生徒に語ったところによれば、最初はトランペット協奏曲を作曲するつもりだったという。だがそれがなかなかうまく書けなかったので、ピアノを加えてみた。するとそれが次第に「ピアノとトランペットのための二重協奏曲」になってしまい、ついには「ピアノ協奏曲」に姿を変えてしまったのだそうである(注)。いかにも、ピアニストとして卓越した才能を備えていたショスタコーヴィチらしい話だ。

たしかに彼は、1930年（24歳）頃まではコンサート・ピアニストとしても活発な活動をしていた。ショパンやチャイコフスキーやプロコフィエフの協奏曲なども演奏していたというから、相当な名手だったのだろう。もちろんこの「ピアノ協奏曲第1番」の初演でソロを弾いたのも、ショスタコーヴィチ自身だった。この協奏曲を書く直前にも、彼はピアノのための作品「24の前奏曲」を完成していたほどなのだ。

因みにこの1930年代初めまでの彼は、彼は急進的なオペラ「ムツェンスク郡のマクベス夫人」を作曲するなど、時代の先端を行く、恐れを知らぬ気鋭の作曲家としての名声を高めていた。――そのオペラが、時のスターリン政権の激怒を買い、ショスタコーヴィチが粛清の危険にさらされ、身を守るために作風の大転換を迫られることになるのは、1936年になってからである。

曲は4つの楽章からなるが、ほぼ切れ目なしに演奏される。第1楽章冒頭から、若い頃の彼に特有の、皮肉っぽい、鋭い感性を持った曲想が展開する。一転して第2楽章は静かな曲想。ピアノの急速な音型とともに第3楽章に移るが、これは1分半ほどで終り、急速な第4楽章に突入する。ここではピアノとともにトランペットも大活躍し、特に終結のプレストに入ってからは、両者が傍若無人なほどの勢いでソロを繰り広げる。全曲の結びは、恐るべきユーモアか、皮肉か。

(注)ローレル・E・ファーイ著「ショスタコーヴィチ　ある生涯」（藤岡啓介他訳、アルファベータ刊）

作曲家プロフィール

ドミートリー・ショスタコーヴィチ
Dmitry Shostakovich 1906-1975

サンクトペテルブルグに生まれ、モスクワで世を去ったソヴィエト連邦時代の大作曲家。15曲の交響曲により20世紀最大の交響曲作曲家としての地位を確立しているが、15曲の弦楽四重奏曲もまた有名である。ソ連の政治体制の中でさまざまな葛藤を体験し、その作風もさまざまな方向に揺れ動いたが、彼自身は自らの音楽作品以外の場でその本心を明かすことはなかった。

マーラー：交響曲 第5番 嬰ハ短調

初演：1904年10月18日　ケルン

妻アルマとの新婚生活の中で完成された大交響曲

古今、歴史に残る大作曲家でもあり、同時に名指揮者でもあった音楽家といえば、メンデルスゾーン、ワーグナー、R・シュトラウスなど何人かの名が挙げられるが、マーラーのキャリアは、特に際立つものであろう。この「交響曲第5番」を作曲した1901年～1902年の頃も、マーラーはウィーン宮廷歌劇場（現国立歌劇場）の音楽監督として多くのオペラを指揮するという激務をこなしていた。もっともそのため、彼の作曲にあてる時間といえば、わずかに夏の

楽器編成	独奏ピアノ、独奏トランペット、弦楽5部

休暇の時しかなかった。彼が自らを「夏の作曲家」と呼んだゆえんである。

マーラーがその夏季休暇の間に作曲活動を行なったのは、オーストリア南部のヴェルター湖畔、マイアーニックにおいてであった。彼は1899年に購入したその土地に山荘を構え、また近くの木立の中に別の「作曲小屋」を建て、そこで作曲を行なうのを常としていた。彼の妻アルマの回想によれば、朝は6時か6時半に起き、すぐにベルを鳴らしてメイドを起こし、朝食を持たせて作曲小屋に向かう。朝食はコーヒーとパンとバター、日替わりのジャム、と決まっていたという。小屋は大きな石の建物で、湿気が多く、窓が三つと入り口が一つ。置いてあるものはピアノと、ゲーテとカントの全集、バッハの作品の楽譜だけだった。彼はそこで午前中に作曲の仕事をし、昼は湖で水泳、午後はアルマとの散歩――というような生活を送ったそうである(注)。おそらくこの「交響曲第5番」も、そうした日課の中で作曲されたのであろう。

この作曲の過程で、マーラーは1901年11月10日に、とある友人の家で生涯の妻アルマ・シントラーと知り合い、翌年3月9日に結婚した。アルマの回想によれば、彼女の彼に対する第一印象は、「群衆の前で演説するような調子で話をする男」だったそうだ。ともあれ、マーラーが彼女を知る前に書きはじめた第1楽章が葬送行進曲調を採りながらも、各楽章の曲想が次第に明るくなり、ついには熱狂的な快活さに達するという全曲の流れも、このアルマとの出会いと結婚――という出来事に無関係ではなかろう。

アルマの回想録によれば、「交響曲第5番」の総譜の清書は、すべて彼女が行なったという。彼女は音楽家としての素地もあったので、それが可能だったのだ。だが「交響曲第5番」がケルンで初演された時には、アルマはちょうど発熱しており、演奏会場には行かれなかった。マーラー自身が指揮したその演奏は非常にうまく行き、大成功を収めたようだった、とアルマは簡単に書いているが、マーラー自身は最初のリハーサルのあとで、「スケルツォは呪われた楽章だ！長い受難の歴史になるだろう！聴衆は、こういう怒り狂う音の海を何というだろう？」と不安に駆られていたという。

マーラーは、初演のあとも、この曲の細かい部分を何度も改訂した。それを反映して、総譜も複数の稿が出版されるというケースを招いている。指揮者とオーケストラにとってはややこしい話である。

悲劇から歓喜へ――暗から明への転換

第2，3，4番と声楽入りの交響曲を書いて来たマーラーは、この「第5番」で、久しぶりに器楽のみの交響曲へ復帰した。大編成のオーケストラを駆使した管弦楽法はいよいよ名人芸の域に達し、圧倒的な迫力を生み出している。楽章は5つからなる。

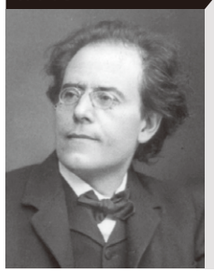
トランペットのソロで開始され、それが輝かしく高潮した瞬間に全管弦楽が最強奏で爆発する第1楽章冒頭は、マーラーの交響曲の中でも一、二を争う劇的なオープニングであろう。この葬送行進曲的なリズムは、第1楽章全体を支配する。そして、多くの指揮者はほぼ切れ目なしに「嵐のように激しい」第2楽章へ突入する。

第3楽章は「スケルツォ（諧謔的）」となっているが、これは長大な楽章で、起伏感に富む。ホルン群が活躍し、特に1番ホルンがソリスト並みの演奏を聴かせるのが特徴だ。全管弦楽が大規模に激動するこの楽章のあと、曲は一転して、ハープと弦だけの有名な第4楽章「アダージェット」になる。マーラーの官能的な陶酔の美感が全開する素晴らしい楽章である。遠くから響くホルンの信号とともに、曲は切れ目なく第5楽章に入り、全管弦楽が何度か昂揚を繰り返しつつ、熱狂的な終結へ突き進む。

(注)アルマ・マーラー著「マーラー　愛と苦悩の回想」（石井宏訳、音楽之友社刊）

楽器編成	フルート4（ピッコロ持替4）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（E♭クラリネット、バス・クラリネット持替）、バスーン3（コントラ・バスーン持替）、ホルン6、トランペット4、トロンボーン2、バス・トロンボーン、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、スネア・ドラム、グロッケンシュピール、タムタム、ホルツクラッパー、トライアングル、ハープ、弦楽5部

作曲家プロフィール



グスタフ・マーラー

Gustav Mahler, 1860-1911

ボヘミアのカリシュトに生れたオーストリアの大作曲家、大指揮者。9つの交響曲（「大地の歌」を除く。第10番は未完）は交響曲史上不滅の金字塔である。ブダペスト王立歌劇場音楽監督、ハンブルク市立歌劇場首席指揮者、ウィーン宮廷歌劇場音楽監督などの他、ウィーン・フィル、メトロポリタン・オペラ、ニューヨーク・フィルなどの指揮者を歴任し、名声を轟かせた。病を得て米国からウィーンに戻り、帰天。